慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石評梅「捨てられた妻」論 : 「新式女性」が語る「旧式女性」
Sub Title	A study of Shi Pingmei's "An abandoned wife" : a "traditional woman" told by a "new woman"
Author	松倉, 梨恵(Matsukura, Rie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.2 (2022. 12) ,p.168 (89)- 181 (76)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	髙橋智教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石評梅「捨てられた妻」論
――「新式女性」が語る「旧式女性」

松倉　梨恵

1.　はじめに

五四時期に活躍した女性作家・石評梅（1902～1928）の「捨てられた妻」（1925）[1]は、夫に捨てられた妻をめぐって書かれた短編小説である。詩経の昔より、中国には捨てられた妻の悲しみや恨みの心情を歌った詩が数多く存在する[2]。しかし、この作品に登場する捨てられた妻は、この時代に特有の背景から生まれていた。五四時期、西洋由来の自由恋愛による新式結婚を理想とする青年が増えるなか、親の取り決めによる旧式結婚（包辦婚）による妻が夫に捨てられるという事態が実際にしばしば起こっていた。石評梅がテーマにしたのは、この五四時期特有の「捨てられた妻」という現象であった。

石評梅自身も、この問題に関係していた。彼女は北京女子高等師範学校の学生時代、呉天放という男性と恋に落ちるが、のちに彼には妻子がいることを知り、彼と別れている。廬隠が石評梅をモデルに書いた小説「象牙の指輪」（1931）[3]には、主人公がW君（呉天放をモデルとする）の妻から「私はよく新聞を読むので、最近の気風では、男性はしばしばもとの妻を捨てて、新式女子と自由恋愛をするということを知っています」「ああ、沁珠女士！　同じ女性として、捨てられた妻の苦悩が分かるでしょう！」[4]と書かれた手紙を受け取り、ショックを受ける様が描かれている。また、石評梅は呉と別れたのちに初期共産党員・高君宇と知り合って親しくなるが、彼にも故郷に旧式結婚による妻がいた。彼は石評梅のために妻と離婚するが、このことに心を痛めた石評梅は、彼の愛を受け入れることはできないまま、1925年3月、高君宇は病気で亡くなっている。

さて、「捨てられた妻」に関する先行研究の多くは、この作品を旧式結婚への

批判を説くものだとする。例えば陳碧月は、この作品が「伝統的な結婚の枠組みのなかで、自我を持たない女性は永遠に他人の道具に過ぎず、最終的にみずから破滅の道を歩むことになると伝えている」[5]と述べる。金文野は、この妻を「旧式結婚の被害者」と捉え、「彼女は貞操、節烈、従一而終という様々な礼教の荒縄に縛られて殺されるのだ」[6]と述べる。常彬はさらに、「石評梅の小説は女性の立場からはっきりと、現代の男性が自由恋愛の旗を掲げて新しいものを好み古いものを嫌がる様を痛切に訴え、捨てられた妻の運命に深い同情を寄せる。彼女たちは古い結婚制度の被害者でもあり、また新しい結婚観の犠牲者でもあることから、彼女たちが受ける苦痛は二重のものであり、傷も二重のものである」[7]と述べ、この妻が古い結婚制度だけでなく新しい結婚観の犠牲者でもあること、そしてこの作品が男性たちの身勝手さにも批判を加えていることを指摘する。

この小説が夫に捨てられた旧式の妻の哀れさを描いた作品であることは明らかであろう。だが、この物語は瑜という名の女性の語り手を通して語られており、この点に関する分析はほとんどなされていない。中本百合枝は、瑜（「私」）が石評梅自身と思われると述べたうえで、「「私」は、作者と同じ立場にある従兄の恋人には何の関心も示さず、完全に従兄の妻の立場に立っている」[8]と指摘するが、この瑜という語り手の持つ役割については、さらに考察の余地があるのではないかと思われる。そこで本論文では、この瑜に注目しつつ改めて作品を分析し、石評梅が捨てられた旧式の妻をめぐる問題をどのように作品に描いたのかを明らかにしたい。

2.　離婚をめぐる視線

作品発表当時、新式の恋愛結婚を理想とする夫が旧式結婚による妻を捨てるということは、実際に多く起こっていた。1917年、蔡元培は「男性が外国へ遊学し、かの国の中等以下の教育を受けた女性を妻とすることを栄誉とし、もとの妻が学校に行っていないことを恥じて、これを捨てる。ああ！　これはまことに過渡の時代の奇怪な現状である」[9]と述べている。また1918年、胡適は北京女子師範学校で行った「アメリカの婦人」という講演のなかで「最近の留学生はちょっと文明の空気を吸ったと思うと、帰国して最初にやることといえば離婚である」[10]と述べている。

五四時期、中国では恋愛・結婚に関する議論が盛んに行われており、西洋式の新思想を学んだ青年たちのあいだでは、従来の親の取り決めによる旧式結婚ではなく、新式の恋愛結婚が理想とされるように変化しつつあった。当時の議論のなかでしばしば参照されていたのは、エレン・ケイの思想である。エレン・ケイは「霊肉一致の恋愛」「恋愛の自由」を説き、同時に「たとえいかに法律上の手続きを経た結婚であっても、そこに恋愛がなければそれは不道徳である」として「自由離婚」を主張した[11]。恋愛結婚を理想とする当時の知識人男性たちにとって、学校教育を受けておらず儒教道徳に従ういわゆる「旧式女性」は理想の結婚相手ではなくなり、その代わりに新式の学校教育を受けたいわゆる「新式女性」が理想の結婚相手となった。だが、当時の青年たちの多くは、若いうちに親の決めた相手と結婚をしていた。そのため、離婚をめぐるトラブルが多く起こり、離婚は人々の関心の集まるトピックとなっていたのである。

1922年4月には、当時多くの読者を有し、恋愛・結婚をめぐって活発な議論がなされていた『婦女雑誌』において「離婚問題専号」[12]と題する特集号が組まれ、離婚をめぐって様々な文章が掲載された。この特集号の「離婚の事実及び批評」「自由離婚の主張と反論」という二大特集に寄せられた読者からの投稿を分析した許慧琦によれば、「掲載された記事の作者32名中、女性はわずか3名だけで、年齢的には殆どが青年男女だった」「その投稿記事から見る限り、絶対多数の投稿者は自由離婚に賛同していた」[13]という。

1923年2月には、東南大学教授・鄭振壎による「私の婚姻史」[14]と題する文章が『婦女雑誌』に掲載され、注目を集めた。鄭振壎は16歳で親の決めた相手と婚約、大学入学前に一時帰省して結婚した。妻は読み書きができず、纏足をし白粉を塗った「旧式女性」だった。彼は妻に纏足や白粉をやめさせ、北京に呼び寄せてみずから読み書きを教え、妻を「新式女性」のように変身させた。彼は妻が自分の理想通りの女性になったと感じた際には一時的に満足したが、のちに理想通りでない部分が出てくると不満を抱くようになり、離婚を決意する。この告白を受けて、同年4月号では「鄭振壎の婚姻史に対する批評」と題する特集が組まれ、18篇の文章が寄せられた。許慧琦はこれを分析し「鄭氏と似たような状況に置かれていた男性読者の多くが鄭振壎の立場に理解を示していた一方、妻の立場に同情したり、男女平等思想を堅持する読者たちは、妻に対する鄭振壎の要求が過酷すぎるとしていた。なお、女性読者の殆どは鄭氏を批判する立場を取って

いた」[15]と述べている。

そして1924年10月には、「女性を尊重する男性は自分が不満に思う旧式の妻と離婚してよいか」というテーマでの原稿募集に対して、14篇の投稿文が『婦女雑誌』に掲載された[16]。14篇の文章は、いずれも旧式の妻の苦境について言及しているものの、その結論は様々である。離婚すべきだと説くものは6篇[17]あり、いずれも妻の離婚後の苦境にも言及しつつ、それでも離婚すべきだと説いている。そこに共通して見られるのは、1つには「愛情のない結婚は不道徳だ」というエレン・ケイ式の結婚観を教条的に実行しようとする態度である。例えば陶儼和は、無学な女性との結婚に満足する知識人男性というのは、女性を道具としてしか見ていないことになるのだから、妻の教育レベルに不満があるなら離婚すればよいと説く。暁星は、結婚の原理からして愛情のない結婚を続けるのは不道徳であって女性を尊重しないことになるから、離婚すべきであると説く。2つ目は、妻の不幸の原因は社会制度にあると主張するものである。例えば王鑑は、もし離婚によって妻に万一の危険が起こったとしても、それは離婚の方法が悪かったのと現在の風俗・習慣が不適当なのであって、女性を尊重しないということとは無関係だと説く。陳淑淵は、旧式の妻が苦境に陥ったとしても、それは旧社会の罪悪なのであって、女性を尊重する男性ばかりのせいではないと説く。

14篇のうち、離婚せずに夫婦関係を続けるべきだと説くものは、5篇[18]ある。いずれも旧式結婚をよしとするのではないが、離婚後の妻の苦境を慮って離婚に反対している。そこに見られるのは、男女の置かれた社会的立場の違いへの視線である。例えば菊華は、男性から離婚させられる旧式の妻は女性から離婚させられる旧式の夫の100倍おり、現在の中国の家庭ではまだ男尊女卑が強いために女性が就学できずにいるという背景を指摘する。朱英女士は、中国の社会では男性が妾を置いたり再婚したりするのは何とも思われないが、女性が再婚するのは賛成されないと指摘する[19]。

以上で見たように、離婚をめぐっては、『婦女雑誌』上でしばしば、恋愛結婚という理想を求める男性の立場からの意見が多く語られていた。これは当時の『婦女雑誌』執筆者・読者の多くが男性であったこととも関係するだろう。一方、旧式の妻の立場に立った意見は女性によるものが多かったようであるが、そこには男性と女性のあいだの社会的立場の不平等さを見つめる視線がうかがえる。

3. 「旧式女性」と「新式女性」

このような社会状況のなか、石評梅は「捨てられた妻」を発表した。この小説は、瑜という女性の目を通して物語が語られる。北京から帰省中の瑜は、従兄・徽之からの手紙を受け取る。手紙には、妻と離婚したいが両親に反対されたため家を出奔することにした旨が書かれていた。従兄は妻と旧式結婚して10年、これまで1度も帰省したことはなく、妻は従兄の家で大姑・舅姑に仕えて暮らしているのだった。従兄が去ったのち、瑜は従兄の家へ赴いた母からの手紙で、従兄の妻は実家に帰り、その翌朝に服毒自殺したと知らされる。

この作品のストーリーは、凌叔華が前年に発表した小説「私が彼にどんな申し訳ないことをした？」(1924)[20]と共通する部分が多い。こちらも、捨てられた旧式の妻をテーマにした物語である。主人公である31歳の胡少奶奶（胡家の若奥様の意）は、17歳で同い年の夫・胡子雲と旧式結婚をするが、結婚3年目に夫が単身アメリカへ留学して以来、夫の実家で舅姑に仕えて暮らしていた。2年前に夫がようやく帰国して喜ぶが、夫は彼女に纏足の足が臭うだとか、髪に油を塗りすぎだとか、社交ができない等と言って冷たくあたる。そんなある時、彼女は偶然、夫とともにアメリカに留学していた王惜芳が夫に宛てた手紙を発見し、2人が恋仲にあることを知る。妻に手紙を読まれたと知った夫は、王惜芳と結婚すると言い、両親と妻の前で離婚を切り出す。胡少奶奶は実家に帰ると告げるが、その夜、遺書を残して自殺する。「私が彼にどんな申し訳ないことをした？」は、善良で罪のない胡少奶奶が身勝手な夫に追い詰められて離婚を迫られ自殺するに至るまでを三人称で描くことで、旧式の妻の哀れさを訴えていると言える。

さて、この2作品は、夫の家で暮らす「旧式女性」である妻が、長年振りで家に帰った夫に「新式女性」の恋人ができたため離婚を迫られて自殺するという、よく似たストーリーを持つ。「私が彼にどんな申し訳ないことをした？」では、夫をめぐる「旧式女性」「新式女性」の両者それぞれの苦衷が描かれている。この作品は胡少奶奶が視点人物であり、彼女が結婚してから自殺するまでに至る心情は逐次読者に伝えられる。それと同時に、王惜芳の心情についても、彼女が胡氏に宛てた手紙からうかがうことができる。

どうして何度もあなたの申し出を断ったかって？　それは旧思想の束縛によ

るものではなく、また旧社会からの非難を恐れたのでもありません、私はそんなものは意に介しません。もしあなたに冷淡にすれば、あなたは奥様と再び良い関係になれるかもしれないと思ったからです。だって奥様は善良で聡明な方ですし、あなたの家でも騒動が起こらずに済むでしょう。[21]

この恋人は、当初は胡氏に心惹かれながらも、その妻のことを思って身を引こうと考えていたが、自分が身を引いても夫婦関係は戻らないだろうことを知り、結婚という手続きを経ずに彼と暮らすことを決断している。このように、この作品では、妻の苦しい心のうちを中心に描くが、同時に夫の恋人の苦衷も示されている。

一方、「捨てられた妻」の従兄の妻は、小説のタイトルとなっていることが示す通り、この物語の中心人物であるが、物語内に登場することはなく、その心情が語られることはない。また、従兄の新しい恋人についても、やはり物語内には登場せず、その心情が語られることはない。そのため、従兄の妻と恋人の内心はうかがい知ることができない。

4. 男性の語りへの疑義

「捨てられた妻」において従兄の妻と恋人の内心をうかがい知ることができないのは、この物語の中心人物は従兄とその妻であるが、語り手は瑜という女性であるためである。北京から帰省中という瑜は石評梅自身に近い人物像であり、おそらく「新式女性」だと思われる。瑜は従兄と妻、従兄の恋人とのあいだでどのようなことがあったのか、直接には何も知らない。彼女が従兄の出奔を知るのは、従兄からの手紙によってである。手紙には、従兄が家族に妻と離婚したい旨を告げたが反対されたために出奔するに至る心情が切々と語られる。

従兄は妻のことを「可哀そうに、妻は鈍くて人並み以上に温厚です。ほかの家だったら良い嫁になったでしょうが、僕の家では、動くことのできる生きる屍でしかありません」[22]と述べ、「妻を解放し、この残忍極まる監獄から逃してやりたい」[23]との思いから離婚を切り出したが、「家族は僕がこうするのは――妻のためなのだということを理解しませんでした」[24]と訴える。また、この手紙には、従兄の母に対する気遣いも強く表れている。手紙の冒頭には「ただ心配なのは、苦

労を重ねて、30年も僕の家で奴隷となっている母のことだけです」[25]とあり、手紙の末尾にも「瑜妹、僕が君にこの手紙を書いたのは、母のためです」[26]と記し、瑜に自分の母を慰めてほしいと依頼する。

この手紙を読んだ作品の読者は、離婚を切り出したのに家族に理解されない従兄に対して同情を寄せたかもしれない。実際、第2節で触れた通り、旧式の妻との離婚を求める男性に対しては多くの読者からの同情が寄せられたのだから、この小説の読者が従兄に同情を示したとしてもおかしくないだろう。従兄も手紙のなかで自分を「過渡期の時代の犠牲者」と述べており、瑜から同情が得られるだろうと期待して手紙を書いたのだと思われる。しかし、瑜が同情を寄せた相手は従兄ではなかった。手紙を読み終えた瑜は「私は母の苦しい胸のうちに同情したが、それ以上に従兄の妻の運命に胸が痛んだ」「従兄は男だから、気に食わなければ家を捨てて出てゆける。従兄の妻はと言えば、女で、従兄に嫁いだ人間なのに、今になって捨てられて、どうやって生きてゆくのだろう。ここまで考えて私はこの哀れな女性のために胸が痛んだ」[27]と、事情も知らずに従兄の家へ呼び出された母に同情すると同時に、従兄とその妻の置かれた立場の非対称性を慮り、従兄の妻に母に対する以上の深い同情を寄せていると明言する。

手紙にはまた、従兄が思いを寄せる人がいるらしいことが仄めかされているが、「この夢は、彼女に叶えてもらいたいとは思いません、ただ彼女が永遠に僕の夢であってほしいのです。僕の魂を全て彼女に捧げたい。僕の心血を永遠に彼女のために流したい、しかし、彼女に僕が誰かを知ってほしくはない」[28]と、自分の思いを相手に告げるつもりはないかのように書かれている。しかし、従兄の家へ発つ母を駅まで見送った際に、瑜は兄嫁[29]から、従兄は女学生と親しくなったために離婚するのだと知らされ、従兄の手紙に書かれていた「妻のため」という離婚理由が建前に過ぎなかったことが浮き彫りになる。兄嫁の話を聞いた瑜は「旧式結婚の残した害毒は、私たちのほぼ皆が身をもって受けるかのようだ。どれだけの男性が自分の家にいる妻を捨て、外に向かって飢えたカラスのように、女性を捕まえようとすることか。自由恋愛の看板のもとで、夫に捨てられた哀れな女性がどれだけ踏みつけにされているだろう」[30]と、心のなかで従兄への批判を強める。

従兄は瑜の妹・琨におとぎ話をしてあげるなどして琨から慕われており、手紙の内容から、瑜と従兄の関係も親しいものであることがうかがえるが、このため

に瑜の彼に対する批判は一層際立つ。この小説では、このように語り手を瑜にし、彼女が従兄からの手紙を読むという形式にすることによって、結婚をめぐる第三者の視点から男性の語りに対する疑義を示しているのだと言えるだろう。

男性の語りに対する疑義については、石評梅ののちの作品「林楠の日記」(1932)[31]にも見られる。「林楠の日記」も、夫に捨てられた妻の物語である。師範学校の卒業生・林楠は、魏琳と旧式結婚をして15年、夫の家で舅姑に仕えながら3人の子どもを育てている。よその土地で党活動に従事する夫が3年ぶりに家に戻るとの知らせが届いて喜ぶものの、帰ってきた夫は冷淡だった。林楠は夫の妹・黛から、夫は北京大学の女学生・銭頤青と親しくなって1年以上になると聞かされる。林楠は離婚も考えるが、3人の子どもを置いてゆくこともできないと思い、身動きできずにいるばかりである。

物語の最後、林楠と夫の顚末を知った夫の弟・璟の恋人・岫琴は、林楠に以下のように言う。

> 璟はいつも私に、自分の家族は良い家族で、仲が良く、両親も性格が穏やかだと言っていたわ。なのに、ここへ来てみたらまったく違った。正直言って、楠姉さん、私ちょっと後悔しているの。琳兄さんと楠姉さんも、仲睦まじい夫婦だったのに、今や銭頤青のためにこんな結果になってしまった。璟だってきっと同じよ、ふん！　男の心なんて当てにならないわね。[32]

岫琴は林楠より6歳年下でソ連に住んだことがあり、璟と恋愛中のいわゆる「新式女性」である。また璟と岫琴は、林楠が「彼らは間違いなく愛の神の翼のもとに匿われた幸せな男女だ」[33]と語るように、仲睦まじい恋人同士のようである。しかし、岫琴は璟が家族について語っていたことが事実ではなかったことを知り、さらに林楠夫婦の顚末を目の当たりにし、璟に対して懐疑的になるのである。

このほか、「毒蛇」(1928)[34]と題する文章にも、男性の語りへの疑義がうかがえる。「毒蛇」は、語り手がスケート場で知り合った琪如という女性について回顧する話[35]である。美しく人懐っこい琪如に「私」は心を奪われるが、実は彼女は3年前に「私」の友人の凌心や子青（いずれも男性）を不幸に陥れた人物なのだと、一緒にスケートに来た友人から聞かされる。琪如のせいで、凌心は海に身

を投げ、子青は離婚したのだという。子青は数日前に「私」に手紙を寄越し、彼の一生の失敗は全て琪如の罪によるものだと書いていた。

作中で「私」やその友人たちは琪如のことを「魔女」と呼ぶが、「私」はそんな琪如について、同時に以下のようにも述べている。

> 暇で暖炉を囲んで何もすることがないときは、しばしば彼女のことが話題にのぼり、一体彼女はどんな人間で、どんな気持ちなのかと話し合った。私は常に彼女を許し、彼女のために弁解していた。時には彼女たちが女性の欠点ばかり言うのを恨めしく思った。罪が生まれれば全て女性に責めを負わせるというのは、理不尽なことだ。[36]

「私」はこうして、男性を陥れた魔女だと噂される琪如の弁護をする。子青は手紙に「全て琪如の罪だ」と書くが、「私」は彼の言葉に疑問を呈していると言えるだろう。

「捨てられた妻」の従兄は、手紙のなかで「僕にはかつて確かに夢がありました。その夢は毒蛇のように僕にまとわりついて6年になります」[37]と、恋人への思いを「毒蛇」（原文：毒蟒）に例えている。瑜は「自由恋愛の看板のもとで、夫に捨てられた哀れな女性がどれだけ踏みつけにされているだろう」と旧式の妻たちの境遇を慮るとき、「同時に騙されて妾になる女性もかなり増えた」[38]と、新しい恋人の側が男性に騙されている可能性をも同時に考慮する。瑜は従兄の恋人について直接的には言及していないが、彼女のような立場の女性ばかりが悪く言われがちなことにも、冷徹な目を向けていたようである。

5. 沈黙する語り手

瑜は内心では終始従兄の妻に同情を寄せ、従兄にも批判的な態度を取っているが、それを口に出すことはしていない。兄嫁が瑜に従兄が出奔するのは女学生の恋人ができたからだと知らせたとき、兄嫁は「従兄も酷すぎるわ、旧式の環境に置かれた哀れな女性の立場を考えないんだもの。ただ、ダンスも踊れて、ピアノも弾けて、社交もできて、評判も高くて、学問もある、よその流行りの女学生に比べて、自分の妻が劣ると思ったんでしょう」[39]と、従兄への批判を率直に口に

する。しかし、瑜は「私は批判したいとは思わず、ただかすかに笑った。家に帰ると私たちはそれ以上従兄のことを話に出さなかった」[40]と沈黙する。また後日、母からの手紙で従兄の妻が自殺したことを知った時も、「兄嫁は母の手紙を読み終えて泣いた。もちろん従兄の妻の末路を憐れんでのことだが、私は泣けなかったし、何も言わなかった」[41]と、涙を流して従兄の妻への同情を示す兄嫁に対し、瑜は沈黙するばかりである。

このように、瑜は従兄の妻に同情を寄せているものの、その気持ちを兄嫁の前で表すことはない。彼女は同じ女性として兄嫁とともに従兄の妻の身の上を嘆いたり、従兄の言動を批判したりすることもできたはずだが、なぜ口を閉ざしてしまうのだろうか。

「林楠の日記」でも、沈黙する主人公の姿が描かれている。岫琴が林楠に「男の心なんて当てにならない」と不平を漏らしたとき、林楠は「彼女はなぜか私に向かって不平を漏らした。私は何も言わず、ただ笑っていた」[42]と、やはり沈黙するばかりである。林楠は日記に以下のように記す。

> 誰も腹を割って話そうとせず、本当は泣きたいのに、涙を飲み込んで笑顔に変える。（中略）本当に嫌だが、私はそうせざるを得ない、丸裸の本性を現すことが許される環境など、どこにあるというのか。私の家で言えば、年長者にも悩みや苦痛があり、年少者にも悩みや苦痛があり、あどけない3人の子ども以外は、訪ねてくる客にだって悩みや苦痛があるのだ。[43]

林楠は師範学校の卒業生であるが、旧式結婚をして夫の家で舅姑に仕えて暮らしており、「新」と言える面と「旧」と言える面を有していた。彼女は同じ家に暮らす1つ上の世代の舅姑、夫と自分、少し年下の璟、黛や岫琴らの、「新」「旧」それぞれの世代の悩みや苦痛を慮るがゆえに、沈黙しているようである。

散文「董二嫂」（1925）[44]にも、沈黙する語り手が登場する。「董二嫂」は、石評梅の哀れな隣人について書かれたものである。董二嫂はいつも姑と夫からひどく殴られ、その泣き声が石評梅の暮らす実家まで聞こえてくる。父や母が隣家の夫や姑に注意したこともあったが、効果はなかった。その後、董二嫂は亡くなり、石評梅はショックを受ける。

董二嫂が亡くなったことを知った石評梅は、「私は勇気もなかったし、そうす

る必要もないと思い、それ以上詳しいことは尋ねなかった。兄嫁のベッドの手すりにつかまってぼんやりと10分ほど立っていた。兄嫁は目を閉じ、張媽は机のうえで薬の包みを検め、昆姪は私の服の裾を引っ張り、こうして黙ったまま10分が過ぎた」[45]と、やはり沈黙する。

この作品のなかで、石評梅の兄嫁の言葉とそれに対する石評梅の反応が印象的である。

> 「珠妹（石評梅を指す：筆者注）！　あなたは朝から晩まで婦女問題や婦女解放について論じているけれど、人から踏みつけられ殴られるばかりのこの哀れな女性を救えるの？」
>
> 彼女は言い終わると私を見ながら微笑んだ。私は体じゅうが戦慄した。自分がこうした人たちのために高尚な哲理を解くことができないことを恥じた。私はどうしたらこうした哀れな女性の同胞を救うことができるのだろう。[46]

兄嫁は石評梅を強く責めているわけではないが、その言葉を聞いて戦慄したという彼女は、婦女問題や婦女解放を論じながら哀れな隣人ひとり救うことができずにいることに自責の念を感じている。また彼女の自責の念は、董二嫂を救えなかったことだけに留まらない。文章の最後に石評梅はこう記す。

> 同時に私と彼女（董二嫂を指す：筆者注）が別の世界の人間であることを恥じ、自分の力があまりに小さいと感じた。私は貴族階級の罪人なのだから、あらゆる知識のない残忍な女性を恨むべきではなく、自分がまだ1人も指導し救済できていないことを恨むべきなのだ。[47]

石評梅は亡くなった董二嫂に限りない同情を寄せるが、彼女を死に追い込んだ「残忍な女性」である姑に対しても、愚かなことをしたのは知識がないためであったとして、知識人である自身の至らなさを責めるのである。

翻ってみると、「捨てられた妻」において、「旧式女性」であろう兄嫁は自身と同じ立場の瑜の従兄の妻に対して率直に同情を示すことができた。だが「新式女性」であろう瑜は、同じ女性ではあっても、知識人という点では従兄と同じ側に

あった。そのため、旧式の妻への同情を感じつつも、同時に知識人女性としての自負をも強く感じていたために、自責の念から沈黙せざるを得なかったのだと言えるだろう。

6. おわりに

以上、「捨てられた妻」を瑜という語り手に注目しながら分析を行ってきた。五四時期、旧式結婚に代わって恋愛結婚が理想とされるようになるなかで、旧式の妻との離婚は人々の関心の集まるトピックとなっていたが、離婚をめぐる議論はしばしば、男性側の視点から論じられていた。そんななか書かれた「捨てられた妻」は、旧式の妻が物語の中心人物ではあるが、妻の内心も、夫の恋人の内心も描かれはしない。しかし、瑜という語り手を設定することによって、女性の視点から、男性の語りへの疑義を読者の前に明示したと言える。だが、物語内で瑜は沈黙するばかりであった。これは、瑜に「新式女性」である知識人として、自分よりも弱い立場の「旧式女性」たちを救おうとする自負と、そこから生まれる自責の念が強かったためだと考えられる。「捨てられた妻」および本論文で取り上げたその他の作品からは、石評梅が男性中心の社会に冷徹な視線を向け、様々な立場の女性たちを慮ると同時に、女性同士の関係において自身の持つ特権性に自覚的であったことがうかがえよう。

註

1 原題：「棄婦」『京報副刊・婦女週刊』周年記念特号、1925年12月20日

2 細田三喜夫「棄婦詩訳解」『人文科学研究報告』第12号、長崎大学学芸学部、1963年2月、42-54頁参照。

3 原題：「象牙戒指」、全20章、第1～17章は『小説月報』第22巻第6号～第12号（1931年6月～12月）掲載、商務印書館より1934年に単行本出版。

4 王国棟編『盧隠全集』第4巻、福建教育出版社、2015年、78-79頁

5 陳碧月『大陸女性婚恋小説：五四時期与新時期的女性意識書写』秀威資訊科技、2002年、191頁

6 金文野『中国現当代女性主義文学論綱』中国社会科学出版社、2011年、52頁

7 常彬『中国女性文学話語流変 1898-1949』人民出版社、2007年、68頁

8　中本百合枝「石評梅の作品に於ける包辦婚姻問題」『国学院雑誌』第88巻第11号、1987年11月、52頁
9　「読寿夫人事略有感」、中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第3巻、浙江教育出版、1997年、116頁
10　「美国的婦人 在北京女子師範学校講演」、欧陽哲生編『胡適文集』2、北京大学出版社、1998年、498頁
11　白水紀子「『婦女雑誌』における新性道徳論――エレン・ケイを中心に――」『横浜国立大学人文紀要　第二類　語学・文学』第42号、1995年10月、1-19頁参照。
12　『婦女雑誌』第8巻第4号、1922年4月
13　許慧琦著・陳妍湲訳「『婦女雑誌』からみる自由離婚の思想とその実践」、村田雄二郎編『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、研文出版、2005年、273-274頁
14　曠夫「我自己的婚姻史」『婦女雑誌』第9巻第2号、1923年2月、7-24頁
15　許慧琦著・陳妍湲訳「『婦女雑誌』からみる自由離婚の思想とその実践」、村田雄二郎編『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、研文出版、2005年、289頁
16　「尊重女性的男子可否与自己不満的旧式妻子離婚?」『婦女雑誌』第10巻第10号、1924年10月、1582-1595頁
17　陶儼和・王鑑・閻平階・陳淑淵・秋芳・暁星の6名による。
18　呉祖光・菊華・星・朱英女士・徐湘如の5名による。
19　このほか、離婚すべきか否かを場合によって分けた意見（景初）、離婚すべきだが同時に離婚後の妻を守るためとしてかなり厳しい条件を示す意見（潘漢年）がある。また、旧式の妻は離婚されると苦境に陥るのだから、離婚せずに新たに家庭を組織するのがよいという意見（許言午）も存在する。
20　原題：「我那件事対不起他？」『晨報』六周年増刊、1924年12月
21　陳学勇編『凌叔華文存』上、四川文芸出版社、25頁
22　文瑾主編『石評梅全集』詩歌・小説巻、中国書籍出版社、2014年、196頁
23　同上、196頁
24　同上、196頁
25　同上、195頁
26　同上、196頁
27　同上、197頁
28　同上、195頁
29　石評梅には兄が1人おり、兄嫁は石評梅の両親のもとで暮らした。兄は長年家に帰らなかったが、石評梅は兄嫁と親しかったようである。
30　文瑾主編『石評梅全集』詩歌・小説巻、中国書籍出版社、2014年、198頁
31　原題：「林楠的日記」『中央日報・紅与黒』第42、43号、1928年10月17日、18日
32　文瑾主編『石評梅全集』詩歌・小説巻、中国書籍出版社、2014年、281頁
33　同上、272頁

34 「毒蛇」『世界日報・薔薇周刊』1928年5月29日

35 文瑾主編『石評梅文集』では散文・遊記巻に収められているが、同文集詩歌・小説巻所収の「石評梅発表作品一覧表」では小説に分類されている。

36 文瑾主編『石評梅全集』散文・遊記巻、中国書籍出版社、2014年、147頁

37 文瑾主編『石評梅全集』詩歌・小説巻、中国書籍出版社、2014年、195頁

38 同上、198頁

39 同上、198頁

40 同上、198頁

41 同上、199頁

42 同上、281頁

43 同上、277頁

44 「董二嫂」『京報副刊・婦女周刊』第50号、1925年11月25日

45 文瑾主編『石評梅全集』散文・遊記巻、中国書籍出版社、2014年、229頁

46 同上、226頁

47 同上、229頁